

キンワンの夏

スマホ兄妹

陽気婢
近親相姦
説話集1



スマホ兄妹



うちの家、両親共働きでさ。

二人とも家に帰ってくるの結構遅くて、だいたい日付変わる頃になっちゃうのね。

：で学校から帰ってきたら、いつも妹と二人きり。

妹は小学4年生。僕は中2。

両親は新しいスマホを買うと、古いスマホを僕たちにくれる。僕のは中学に入ってから格安のを契約して外でも繋がるようにしてくれたけど、妹のは家の中のWiFiでしか使えない。でも友達に教わったりして家で暇な時にいじったり、けっこう使い倒してる。

それである時、家に帰ると妹がエロ動画を見ていた。

本人も僕が帰ってきたのには気づいてたと思うんだけど、お構い無しにスピーカーから喘ぎ声が聞こえてた。

「それ子供が見ちゃいけないやつじゃん」

後ろから声をかけたけど、妹は「うん」としか言わない。

「…なんで見てるの？」

何でも仲の良い友達に教えてもらったらしい。

「ダメじゃん」18歳未満は見ちゃいけないと諭したら「お兄ちゃんは見たことない？」と聞かれた。

「まあ、あるけど…」

「ダメじゃん」と切り返される。

言葉に詰まって、とりあえず親に見つかったら怒られるぞ…とか言おうとしてたら、妹が画面上の激しい男女の絡みの実演動画を指し示しつつ「ね、こういうことかと思う？」と聞いてきた。

「相手がいればね」と答えると「ふーん」と言つて、また画面に目を戻した。

僕は好奇心から尋ねた。

「お前はどうかなの。…したいと思う？」

「ん…」少し考えた後、「相手がいれば」と答える。

それはやばいよ小学4年生が…とか、色んなことを頭の中に駆けめぐらせながら、口から出た言葉は「例えば誰としたい？」だった。

妹は僕の方をじっと見つめながら言った。

「お兄ちゃんとか…」

正直嬉しかった。

いや、それは妹を性欲の対象として見てたってことじゃないよ？

単純に好かれてるって事が嬉しかっただけで…。ただ膨らみかけた胸とか、女の子らしくなってきた仕草とか、全然意識してなかったと言えば嘘になるけど。

…が、ここは兄として自分を律する場面だった。「嬉しいけどヤバいつて、それは」

「嬉しいけど？」

「近親相姦じゃん」

「お兄ちゃん、私が相手だと嬉しいの？」

妹はお構いなしにぐいぐい迫ってくる。

「いや嬉しいけどさ…」妹のスマホからは、相変わらず男女の息を弾ませる声が聞こえる。

「どうしたらいいと思う？」

「兄弟で本当にやっちゃうのはヤバいつて」

妹に答えながら半分、自分に言い聞かせてる僕。

「…つて言うかさ、お前まださ、大人の体になんないと、あんま感じないんじゃないかな」

「そうかな」

「まだこんなふうに入んないと思うし」エロ動画では、もろに男女の交接部分が写っていた。「最初は痛いって言うよ」

「でも触つてると気持ちいいよ。…こことか、おっぱいとか」

そう言つて妹は、スマホを持ってない方の手で自分の股間に手を伸ばした。…で、いきなりのオナニー告白に戸惑う間も無く、無邪気に彼女は畳み掛けてくる。

「お兄ちゃんも触ったりする？」

「まあ…」と僕は、何とも曖昧な返事をした。

「どんな風に」妹が身を乗り出して、僕の反応を伺っている。

彼女の手元のスマホでは、今も男女の情交が激しさを増していく…。

その時には僕は、長椅子に座った妹の横に陣取っていて、既に勃起しまくりで…。勃ってるのを妹に知られぬよう前かがみになっていた。

スマホ画面では扇情的なセックスが延々と続いている。

（お互いに見せっこしようか）という言葉が頭に浮かんだのを、すぐに打ち消した。

欲望をなんとか抑えつつ、時おり妹と目を交わすうち、動画ではクライマックスに達したのか、男がひとときわ激しく腰を動かしたかと思うと急にペニスを抜いて、女の腹に向け絞り出すような声と共に、ピュッピュッと精液を迸らせた。

その瞬間は、二人して画面に見入ってしまった。

気が緩んだ僕は、つい妹に「本当に射精するところ見たい？」と尋ねた。

「出来るの？」喰いつく妹。「見せて！」

ここまで来たらもう僕も我慢も限界だった。

両親には絶対に言わないよう強く念を押すと、妹はウンウン頷く。

胸の奥の疼きとか、下腹部で荒れ狂う血流とか、背徳感からくる体の震えとか、それら全部を振り払い、ただ欲望で満たさんがために急いでズボンとパンツを一緒に下ろすと、血管の浮き出たそそりたつ肉棒を彼女の前にさらけ出した。

妹は食い入るように見つめている。

僕は膝立ちになり「ほら、こんなふうに」と言っ、右手でチンコを握る。

亀頭の先にカウパー液が滲んでいる。仮性包茎の僕は、その透明な粘液をいったん皮で包み込むようにしてから、ゆつくりと亀頭を露出させた。

亀頭全体に広がった粘液が潤滑油となっ、いきつもどりつする皮の刺激をやわらげる。

その生々しい動作の一部始終を、妹は可愛い顔を上気させながら興味深そうに観察していた。

口でもらおうか…とか手を添えて一緒にしごいてもらおうか…とか、考えるとそれだけで興奮度がいやまし、いつも以上の駆け足で放出を求める内圧が高まってくるのがわかった。

考えた末に僕は、ダメ元で頼んでみた。

「そこに横になつて。…おっぱいとあそこ見せて」今の動画みたく、お腹に出すから…。

僕の差し迫った表情を見て、要求を理解した妹は大急ぎでキャミソールをたくし上げ、下もおろすと、小ぶりな乳房と無防備なワレメが丸見えの裸身をソファアに横たえた。

「ああつ。…出るよつ。でっ…」

今までになく充血したチンコをいつそう激しくしごと、精子の群れが細い射精管の中をせり上がってくるのを感じた。僕は妹の体をまたいで亀頭の先を彼女のへそに向けた。

そして彼女の肌に白い飛沫を解き放った。

お腹の上に放出された精液の一滴を指先ですくいとって、妹は言った。



「すごいいっぱい出た」

僕は溜まっていたものを絞り出してから、ゆっくりと彼女の隣に身を横たえた。そうして息を整える。妹は指の間で糸を引く精液の感触を楽しみながら、こちらに顔を向け僕に確かめた。

「ねえ気持ちよかった？」

「ん…」

実際、射精は長く続いて、これでもかってくらい何度も快感の奔流が体の中を駆け上ってくるのを感じたし、出した量も今までで一番多かったかもしれない。ピークには味わったことがないほど興奮していた。今は次第に落ち着いてきている。

「いいな…。私も気持ちよくなりたい」

出しきった僕は賢者タイムだった。でも彼女の言葉に、自分だけ先に一人で快楽を得てしまったバツの悪さを感じた。

妹を気持ちよくさせねばならない。

それは兄と言うより、男としてのプライドの問題でもあった。

僕は裸の彼女の上に散った精液に指を滑らせ、小さなふくらみの上までゆっくりと引き延ばした。そして濡れた指先で乳首の真ん中を押さえたり離したりしてみた。

その様子をじっと見ている妹。続けていると、乳首が少し硬くなるのがわかった。

「気持ちいい？」と聞いてみる。

彼女は目を閉じて、少し鼻にかかった息を漏らす。

「うん。…気持ちいいよ、お兄ちゃん」

その切ない声を聞いて僕は、急に妹にキスしたくなった。

「キスしてもいい？」

答えるよりも早く、妹は口元を近づけてきた。きっと彼女もそうしたかったのだ。唇を重ねて、おそろおそろ差し込んだ舌も彼女は受け入れて、お互い舌を絡ませながら夢中で吸い合った。僕が見る前に、エロ動画でディープキスの場面も見ていたのかもしれない。

キスの間も、乳首への刺激は続いていた。：両手を使って両方の乳首に。そうして片方の手を少しずつ股間にずらしていき、妹の割れ目に沿って滑り込ませようとした瞬間に、ふと思った。

（精液まみれの指）

妹はまだ初潮が来てないと思うけど、さすがに膣に突っ込んだじゃうのは：ちよつと、どうなんだろう。

僕が顔を離すと、妹はとろんとした表情で問いかけてきた。

「どうしたの？」

僕は彼女の股の手前で止めた手を、再びお腹に戻して、そこにまだ溜まっている精液を擦りつけながら言った。

「お風呂一緒に入ろうか」

脱衣所で服を脱ぎ捨て、二人して真っ裸になって浴室に入った。

蛇口をひねってバスタブにお湯を注ぎながら、シャワーで手や体についた精液を洗い流す。タオルで石鹸を泡立て全身に引き伸ばしていると、またちよつとエッチな気分になってきた。

椅子に座った僕の膝の上に妹を同じ向きに跨らせ、後ろから泡まみれの手で妹のおっぱいを包み込むようにして、軽く揉んだり指で乳首を弄ったり…。妹のうなじからほっぺに唇を滑らせると彼女も振り向いて僕の口に舌を絡めてきた。さつき射精したばかりの僕のチンコも、もう回復しかけていて彼女の股の間から剥けかけの頭を出している。

彼女は手でそれを弄んだり、腰をずらして割れ目を当てたりしている。

(欲しいのかな。…どうなのかな)

そんなこと思いながら、ずっとキスしながら乳首を責めて、石鹸まみれの身体を押し付けあい擦りあい、抱きあったりしていると、まただんだん気持ちが高ぶってきた。

全身の泡を流した後、妹をバスタブの浴槽の縁に座らせた。

股を大きく開かせ割れ目の中の未発達のアソコをむき出しにさせる。

僕は「気持ちよくしてあげるね」と言っつて、そこに舌を這わせた。

周りの太ももの付け根から少しずつ近づけて小陰唇に沿うように舌を滑らせる。膣の穴にほんの少し舌を入れたりして…その上の小さな突起に触れて、舌でつつくような所作を繰り返した。彼女は体をビクツとさせ、その間にも両手の指はまた彼女の乳首に戻って、その先端を弄り回している。

「いい?」と確認を取ると、彼女は頷く。妹も何か期待しているようだ。



愛撫を続けながら表情を伺うと彼女は目をトロンとさせ、口をあけて「ああ」とか「いい」とか…喘ぐような声を出している。感じてるんだと思うと僕も嬉しくなる。

ずっと同じパターンで舐めるのも芸がないので、僕は緩急織り交ぜ、細いビラビラに舌を這わせながら上唇で突起部を押さえたり、割れ目全体を口で咥えこんで中に唾液を溜めて、じゅぷじゅぷ言わせたりして妹の反応を見た。その度に彼女の息づかいが激しくなるのはわかったが一番感じたっぽいのは、すぼめた口でクリトリスの辺りを覆って、泡立つように吸って吐いてを小刻みに繰り返した時だった。

妹は「んゝっ、んゝっ…」と息を殺しながら僕の頭をつかまり「おにいちゃん…おにいちゃん、それ気持ちいい…」と声を上げた。

だんだん激しく小刻みに刺激を与えていくと妹はいつそう強く僕の頭にしがみつき、やがてふっとその力が抜けた。

（イッたのかな…）

そう思っただけで彼女が顔を離すと、彼女はぐったりして身を預けてきた。上気した顔で、まだ息を切らしている。

「大丈夫？」と聞くと、「うん」とだけ…。

「気持ちよかった？」と聞いても、「うん」と。

ずっとそのまま、ぎゅっと抱きかかえるようにして、落ち着くのを待った。

汗と唾液と体液を流してから浴槽に浸かった。

妹のアソコを舐めまわしてた間に、お湯はすり切り近くまで達していて、二人一緒に入るとその分の湯が洗い場に溢れ出て洗面器や椅子がぷっかり浮かんだ。妹はそれを面白がるでもなく眺めていた。

お風呂の中で今度は妹を股の上に向き合って座らせ、またキスして舌を絡ませあったりお互いの乳首をつまんで硬くさせたり、勃起したペニスで彼女の股をつつく真似事をしたりして戯れあった。

「私のあそこに入るかな」

そう言っつて自分の割れ目にあてがう仕草をするのを慌てて制した。本当に入っちゃったら…。

「だめだよ。入っちゃったら赤ちゃんできちゃう」

実際には生理もまだみたいだし、ないと思うけど念のため。なにより、妹の処女を奪っちゃうのはヤバいと思った。

そんなギリギリの攻防が続いて再び興奮が抑えきれなくなってきた。僕は妹とお風呂を出てタオルで丁寧に拭くと、自分の部屋に招き入れベッドに彼女を寝かせた。

「今度はお兄ちゃんとなめっこしよう」

ためらうことなく妹は僕のチンコを口に含んだ。そして私にもして、と言わんばかりに股を広げて…。

僕は背徳の喜びに震えながら彼女の股間に顔を埋めた。



両親が帰宅する前に、僕は服を着てシーツを整え、乱れた性戯の痕跡を消した。妹に今日のことは秘密だよとさらに念を押す。

「友だちにも言っちゃダメ？」

「ダメダメ！」：ヤバイ、言うつもりだったのか。

僕は誰にも言わないようにと、しつこく言い含める。

腹ペコだったのでカップラーメンを作って食べた。そのあと自分の宿題をやりながら妹のを見てあげて、終わってテレビ見てたら妹が眠そうな目をして聞いてきた。

「またしてくれる？」

「うん」と答えた。：もちろんだ。

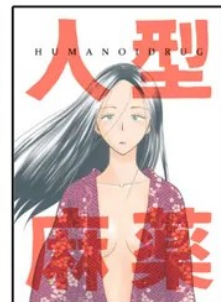
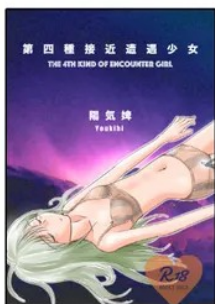
抱きしめてキスをする、スイッチが入りそうになる。3回射精した後でもまだ欲しくてたまらなかったが、なんとか持ちこたえて「明日ね」と言った。

「うん、わかった」と妹。「おやすみ」ベッドに向かう。

僕も追いかけていたのを我慢して、もろもろ片付けてから自分の寢床に着いた。隣の部屋で眠る妹に心で呼びかける。

（また明日：）

まあそんな感じで…僕と妹はエロ動画を見ながら、互いの体を喜ばせるのに夢中の毎日です。



☆最後までお読みくださり、ありがとうございます！

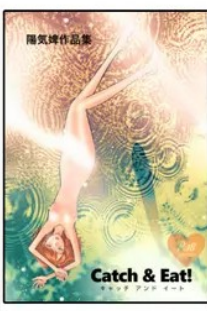
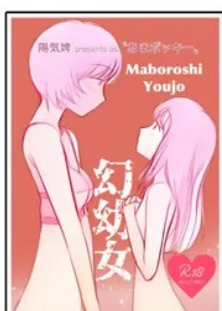
☆この無料作品を気に入った方は是非、陽気婢の有料作品をご購入ください！
同人誌・商業コミックス共に、各電子書店にて販売中です。

☆とにかくエッチな作品を...という方には『アナンガランガ』にて隔月連載中の
「お姉さんといいたいことしたい？」陽気婢短編オムニバス」がオススメ。
FANZA、DLsite、BookLive!などで単品販売しています。



☆最新情報は陽気婢のTwitterを、ご確認ください
(Twitterイラスト集2019年版も発売中です)。

陽気婢



☆陽気婢の作品情報サイト

<http://youkihiworks.mystrikingly.com/>

☆陽気婢Twitter

<http://twitter.com/youkihi>